

チノ語 -mɤ の「多機能性」*1

—漢藏語と対照しながら—

林 範彦

0 はじめに

中国雲南省景洪市で話されるチベット・ビルマ諸語の一つ、チノ語悠楽方言*2には (1) のように、-mɤ という接尾辞が表面的には様々な機能を持って生起する。

*1 本稿は 2005 年 10 月中国厦門大学で行われた The 38th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics で口頭発表した原稿: Hayashi (2005) を日本語に訳し、大幅な加筆・修正を施したものである。質疑応答の場で重要なコメントを頂いた包智明教授, George Bedell 教授, James A. Matisoff 教授, 孫天心 (Jackson Sun) 教授に感謝申し上げる。

*2 [チノ語悠楽方言の音素目録]

チノ語の音素目録は、[子音] /p, ph, t, th, k, kh; ts, tsh, tʃ, tʃh, ɕ, ɕh; m, ɱ, n, ɳ, ɲ, ɳ, ŋ, ŋ; l, ɭ; f, v, s, z, ʃ, r, ɕ, j, x, ɣ; (w)/, [母音] /i, e, ə, ɛ, ɤ, a, ɔ, ɔ, ɤ, o, u, u/ である。声調素は /55, 44, 33, 35, 42/ である。音節構造は頭子音 + 介音 + 主母音 + 末子音/ 声調で構成される。音韻に関する詳細は林 (2002) を参照されたい。

なお、本文中で同じ形態素ながら調値が相互に異なることがある。これらは環境によって声調が交替する場合である。このような形態素は、本文中で引用する際、声調を表記しない。

また、本稿では発表者が主に 2003 年夏から 2006 年夏にかけて中国雲南省西双版纳傣族自治州景洪市基諾郷において断続的に調査したチノ語悠楽方言巴卡下位方言のデータを用いる。より自然な発話を書き起こしたものも含まれる。発表者の執拗な調査に辛抱強く答えて頂いたチノ族である王阿珍さん (女性, 1980 年生) にこの場を借りて心よりお礼申し上げたい。また多くの自然発話データを提供していただいた玉納さん (女性, 1950 年頃生) にも感謝申し上げる。本稿ではグロスを見ているだけでは理解しにくい場合に、[直訳] を付している。しかし、完全な直訳ではなく、実際に表す意味よりもより逐語訳に近いという程度である。

本研究の基盤となる現地調査は多くの研究費の援助により実現した。2003 年および 2005 年の調査は日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) の援助を、2004 年夏の調査は文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 S) 「チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解説—」 (研究代表者 長野泰彦) の援助を受けている。この場を借りて感謝申し上げる。

- (1) a. khɣ⁴² a⁵⁵mɛ⁴²mɛ⁴² pə³⁵=pə⁴⁴-mɣ⁵⁵ -la⁴²?
 3SG.NOM 背が低い.RDP 太い=太い.RDP-NML Q
 「彼は背が低くて太った人か?」
- b. [khɣ³³-lo⁵⁵ waɣ³³pa³⁵ pan³⁵-mɛ⁴⁴] m³³-mjə⁴².
 それ-ように ネットカフェ する-COMP 話す-PART
 「(彼/彼女は) そのようなネットカフェをやると言った」
- c. u⁵⁵sə⁵⁵ nə⁴² mo⁵⁵-le³³-mɣ⁴⁴.
 先ほど 2SG.NOM NEG-行く-PAST
 「先ほど (そこへ) あなたは行かなかった」
- d. a⁵⁵mo⁴⁴ [ma³³-nə⁵⁵-tə⁴⁴-mɣ⁴⁴] zo⁵⁵ku⁵⁵ jə³³-mɣ³⁵.
 母 NEG-聞く-EXP-REL 子供 叱る-PAST
 「母は言うことを聞かぬ子供を叱った」

まず、-mɣ の形式は声調交替を除いて考えれば、基本的に -mɣ と -mɛ の 2 種類の形式がある。

接尾辞 -mɣ は (1) を通覧すれば、いずれも動詞ないし節に後接し、以下のような機能を表面的に担っている。(1a) では pə³⁵=pə⁴⁴ 「太っている」という動詞の重複形の末尾に -mɣ が後接して名詞化している。(1b) では「する」という動詞 pan³⁵ に後接して、それを含む節を補文化している ([] 内は補文をあらわしている)。(1c) では「行く」という動詞 le³³ に後接して、過去をあらわしている。(1d) では「聞く」という動詞 nə⁵⁵ に後接して、それを含む節全体を関係節化している ([] 内は関係節をあらわしている)。

このように表面的には -mɣ は多くの機能を持っていると記述できる。しかし、はたしてこれらの機能は本質的に固有のものであろうか、という問題が生じよう。同一形態素が多機能性を有するということは、実際にはその形態素の生起する環境に応じて実現する機能 (あるいは用法) が異なるように見えるだけなのではないだろうか。

チノ語の記述を行った先行研究である蓋 (1981, 1986) では、「構造助詞 mɣ⁴⁴」としてその存在を認め、若干の記述を行ってはいる。しかし、この助詞が表面的に多機能的であるという記述やその詳細な分析についてはなされていない。

本稿では、-mɣ がチノ語において表面的に多機能的に生起する実態を記述しながら、本質的には 2 つの機能にそれらを集約することができると論じる。また漢語をはじめとする周辺諸言語との対照を通じて、このことが持つ意味を類型論的に考察していく。結論としては、-mɣ のごとき形態素が同一形式でありながら

多機能的であることは決して特殊ではなく、漢藏語において一般的な現象であると見なせる*³。更に、**-mɣ**の通時的変化と言語接触による影響について言及する。**-mɣ**はチベット・ビルマ祖語の共通形式から発展した可能性があり、また漢語 *de* の影響で、新しい用法を誕生させていることについて指摘する。

本稿の構成について述べる。まず、**1**で**-mɣ**とチノ語の動詞複合形式の背景について説明する。**2**で**-mɣ**の名詞化、補文化、時制標識、関係節化の各機能について、具体例を挙げて記述する。その結果、基本的にはこれらの4機能を名詞化と関係節化の二つにまとめなおすことができることを述べる。**3**でチノ語の**-mɣ**に対応する漢藏語の助詞類について引用し、チノ語の**-mɣ**と対照する。また**-mɣ**の通時的変化について言及し、漢語から構造的借用を受けている可能性について触れる。**4**で本稿をまとめる。

1 **-mɣ**とチノ語の動詞複合形式

本節では**-mɣ**の形式とチノ語の動詞複合形式の特徴について説明する。

1.1 **-mɣ**の形式

上述したように、**-mɣ**の形式は声調交替を除いて考えれば、基本的に2種類の形式がある。すなわち、**-mɣ**と**-mɛ**である*⁴。

両者の違いは元来、悠楽方言の更に詳細な下位方言間の差異に起因すると考えられる。特に、**-mɛ**はパカー(巴卡)下位方言やルトウ(洛特)下位方言の話者が好んで用いる。しかし、同一下位方言内でも両者が現れることがある。その場合、両者に意味のおよび機能的な差異は生じない。このため、現在では両者は純

*³ 言語の経済性の観点に立てば、一形式に対して一機能であることが最も合理的であるようにも思われる。そのため、同一形式でありながら多機能に対応できる現象は一見特殊であるようにも考えられる。しかし、出現位置や形態統語的構造の差異によって機能が予測できる場合、同一形式で多機能を標示できることはより経済的である。本稿ではこのような現象がチノ語のみならず、漢藏語一般で見られることを述べる。

*⁴ 実際には関連する形式として**-m**がある。

i) mi⁵⁵khɔ⁵⁵la⁵⁵ŋjo⁴²-a⁴⁴, mɾɔ⁵⁵=mɾɔ³⁵-a⁴⁴, me³³tu³³ŋu³³=ɛ⁵⁵-m⁵⁵.

若い女性 高い-PART 美しい=美しい.RDP-PART 梅毒 COP=POSS-NML

「若い女の子で背も高くてきれいなんだけど、梅毒になっているの」

i) の例の文末に置かれている**-m**は名詞化の機能があり、おそらく本稿で扱う**-mɣ**と関連していると考えられる。しかし、いかなるときにこの**-m**が生起し、**-mɣ**といかなる関係があるかについてはいまだ不透明な部分が多い。それについては別稿で論じたい。

粹に形態的な自由変異をなすと考えてよいだろう。本稿でも以下の例で -mɣ だけでなく、-mɛ が多く現れる。-mɛ の現れる例も、本稿では -mɣ の例として取り扱う。

1.2 チノ語の動詞複合形式の概観

チノ語は名詞句および動詞複合形式ともかなり膠着性の高い性質を示す。本稿では名詞句は内容に大きく関係するわけではないため、省略する。本小節では動詞複合形式についてモデルを示しておく。

表 1 チノ語の動詞複合形式(モデル)

(PREV)-(PREF₁)-(PREF₂)-(PREF₃)-[**VERB**]-(**ACP**)-(B/R)
 -(T/A₁)-(T/A₂)-(CAUS)-(AUX₁)-(AUX₂)-(T/A₃)-(still)-(T/A₄)

表 1 では動詞 ([**VERB**]) を主軸に、接頭辞類と接尾辞類が結合する。表 1 で掲げた各スロットには (2) のような接辞類が具体的に入る。

- (2) a. PREV: tɕɛ⁴², ʃɔ³³ (「とても ~」), tɕɣ⁵⁵ (「より ~」)
 b. PREF₁: a₁- (名詞化), ma- (否定), thə- (禁止), a₂- (禁止)
 c. PREF₂: pi-, khə-, ja- (使役)
 d. PREF₃: m- (使役)
 e. ACP: -khjo (達成)
 f. B/R: -mə (benefactive, 受益), -ʃi (reciprocal, 相互)
 g. T/A₁: -kɔ (進行)
 h. T/A₂: -tɔ (経験)
 i. CAUS: -vi (使役)
 j. AUX₁: -khju (「~できる」), -pɕɛ (「あえて ~する」)
 k. AUX₂: -ŋu (「~したい」), -mɣ (「~のようだ」)
 l. T/A₃: -mɣ (過去), -mɛ (未来)
 m. still: -suw (「まだ ~」)
 n. T/A₄: -a (完了)

表 1 に見るように、動詞複合形式は極めて膠着的である。この中で T/A₃ のスロットに過去を表す -mɣ が入る。(1) で示した他の 3 つの例に見られる -mɣ も基本的に動詞複合形式内ではこの位置に入ると考えられる*⁵。

*⁵ -mɣ は後述するように、節末に現れ、関係節化や補文化の機能を持つ。関係節化や

2 チノ語の -mɣ の機能

本節ではチノ語の -mɣ の表面的な意味・解釈に現れる基本的な機能について記述していく。上で触れたように、-mɣ は 4 つの機能を表面的な意味・解釈において持つ。すなわち、名詞化、補文化、時制標識、関係節化である。また、いずれの機能においても -mɣ は動詞ないし節にのみ後接する、という原則を守る。

以下、それぞれについて、例を挙げて説明していく。

2.1 名詞化

-mɣ は名詞化の機能がある。名詞化の機能が実現するとき、基本的には動詞に後接し、文中で用いられる場合である。モデル化すると表 2 のようになる。

表 2 チノ語の -mɣ : 名詞化

構造	文内位置
[VERB-mɣ]	文中

-mɣ が名詞化で表すものは、基本的に「人」「場所」である。「対比」や「推測」のときにも用いられることがある。2.1.1 以下の小節で具体的に見ていこう。

2.1.1 人

まず、-mɣ によって名詞化された動詞 (句) が人を指す例である。(3) の例を見られたい。

(3) a. khɣ⁴² a⁵⁵mɛ⁴²mɛ⁴² pə³⁵=pə⁴⁴-mɣ⁵⁵ -la⁴²?

3SG.NOM 背が低い.RDP 太い=太い.RDP-NML Q

「彼は背が低くて太った人か?」 (=1a)

b. khju⁵⁵-mɣ⁴⁴

盗む-NML

「泥棒」

(3a) は pə³⁵=pə⁴⁴ 「太っている」という動詞の重複形の末尾に -mɣ が後接し、「太った人」を表している。(3b) は khju⁵⁵ 「盗む」という動詞に -mɣ が後接し、「盗む人」、すなわち「泥棒」を表している。このように、-mɣ は動詞 (句) に後接

補文化のときの -mɣ は表 1 の T/A₄ よりも後に生起する場合もある。

し、名詞化した上で、意味的には「(当該状態を担っている)人」「(当該動作・行為を)する人」を表すことができる。

2.1.2 場所

次に -mɣ によって名詞化された動詞(句)が場所を表す例を見よう。(4)の例を見られたい。

- (4) a. lə^{44} $\text{a}^{33}\text{tha}^{55}\text{pɔ}^{44}$ $\text{ɕa}^{55}\text{-to}^{44}\text{-mɣ}^{44}$, $\text{ŋa}^{55}\text{vu}^{44}$ $\text{mɔ}^{55}\text{-lu}^{33}\text{-su}^{55}\text{-a}^{44}$,
あそこ 上方 住む-EXP-NML 1PL NEG-来る-まだ-PFT
 $\text{khœ}^{35}\text{-to}^{33}\text{-mɛ}^{55}\text{-xa}^{44}$.

作る-EXP-PAST-PFT

「(我々が)住んでいる上のところは我々が来る以前にすでに建てられていた」

- b. $\text{lə}^{33}\text{-pu}^{55}\text{-xɣ}^{44}\text{-mɣ}^{44}=\text{a}^{44}$ $\text{zu}^{55}\text{-ɔ}^{55}\text{-jɔ}^{44}$ $\text{ŋu}^{33}\text{-mɣ}^{42}$,
あれ-くらい-遠い-NML=VA 歩く-PART-なければならない COP-なら
 $\text{a}^{55}\text{ja}^{42}$.

難しい

「そんな遠いところまで歩くのは難しい」

(4a) は $\text{ɕa}^{55}\text{-to}^{44}$ 「住んでいる」という動詞複合形式の末尾に -mɣ が後接し、「住んでいるところ」という場所を表している。日本語訳としては先行する $\text{a}^{33}\text{tha}^{55}\text{pɔ}^{44}$ 「上方」に修飾させて訳すほうが自然ではあるが、ここでは $\text{ɕa}^{55}\text{-to}^{44}\text{-mɣ}^{44}$ 自体が一つの独立した名詞句となっていることに注目したい*6。

(4b) は $\text{lə}^{33}\text{-pu}^{55}\text{-xɣ}^{44}$ 「あれくらい遠い」という形式の末尾に -mɣ が後接し、「あれくらい遠いところ」という場所を表している。xɣ⁴⁴ は元来、形容詞 $\text{a}^{33}\text{xɣ}^{55}$ 「遠い」の語根であるが、統語的性格としては動詞と同じである。それが $\text{lə}^{33}\text{-pu}^{55}$ 「あれくらい」という副詞的要素により修飾され、 $\text{lə}^{33}\text{-pu}^{55}\text{-xɣ}^{44}$ 「あれくらい遠い」という形容詞句を形成している。-mɣ はその末尾に置かれ、全体を名詞化し、場所を表している。特に場所を標示する後置詞 =a⁴⁴ が置かれていることが

*6 2.4.2 で後述するように、-mɣ による関係節は主名詞に後続することもできる。よって、(4a) も関係節 $\text{ɕa}^{55}\text{-to}^{44}\text{-mɣ}^{44}$ が主名詞 $\text{a}^{33}\text{tha}^{55}\text{pɔ}^{44}$ に後続していると捉えることも可能であろう。しかし、この例では lə^{44} 「あそこ」が $\text{a}^{33}\text{tha}^{55}\text{pɔ}^{44}$ 「上方」を指示し、それと $\text{ɕa}^{55}\text{-to}^{44}\text{-mɣ}^{44}$ 「住んでいるところ」を並列していると解釈する。よって、ここでは $\text{ɕa}^{55}\text{-to}^{44}\text{-mɣ}^{44}$ 自体が $\text{a}^{33}\text{tha}^{55}\text{pɔ}^{44}$ を修飾する関係節ではなく、独立名詞句であると解釈しておく。

らも名詞化されていることは明らかである。

2.1.3 対比と推測

発話者が特定の行為について対比したり、推測を述べる際に動詞複合形式を -mɿ により名詞化することがある。(5) の例を見られたい。

- (5) a. ɲɔ³⁵ kɔ⁵⁵tɔ⁴⁴ tɔ⁴⁴=lɛi⁴⁴-mɿ⁴⁴ ma⁵⁵-ɲw⁴², tshi⁵⁵=lɛi⁴⁴-mɿ³⁵.
 1SG.OBL 服 着る=破れる-NML NEG-COP 洗う=破れる-NML
 「私の服は着て破れたのではなくて、洗って破れたのです」
 b. mi⁵⁵ɲɔ⁵⁵ɲ⁴⁴ thi⁵⁵=ɲ⁴⁴ xo³³-kɔ⁵⁵-ɛ⁴⁴-mɿ⁴⁴ , mi³³tha⁵⁵.
 明日 1=CL 降る-PROG-POSS-NML 雨
 「明日は一日雨が降るのだろう」

(5a) では 2 箇所 で -mɿ が生起している。すなわち、動詞複合形式 tɔ⁴⁴=lɛi⁴⁴ と tshi⁵⁵=lɛi⁴⁴ の末尾である。この例は行為が対比されており、「服が破れている」理由は前者ではなく、後者であることが示されている。この例では、前者・後者ともに -mɿ により名詞化されている。前者では動詞複合形式が否定辞 ma により直接否定されているのではなく、tɔ⁴⁴=lɛi⁴⁴-mɿ⁴⁴ という名詞句が否定辞を伴ったコピュラ ma⁵⁵-ɲw⁴² で否定されている。

(5b) は動詞複合形式の末尾の -mɿ にやはり注目したい。この例では xo³³-kɔ⁵⁵-ɛ⁴⁴ 「雨が降るだろう」*7 という動詞複合形式が -mɿ により名詞化され、日本語に直訳すると「雨が降るだろうこと」となる。本例では「明日の天候状態」を -mɿ によって構成された名詞述語文を用いて表現することで、発話者の推測を提示する機能があると考えられる。

2.2 補文化

次に -mɿ の補文化の機能について見ていこう。-mɿ は節末に置かれるとき、補文を形成する機能がある。モデル化すると、以下の表 3 のようになる。

-mɿ により補文化された節は、以下に見るように伝達および思考・感情を表す動詞の目的語として機能することが多いが、若干の例で主節の主語として機能することもある。以下、順次記述していく。

*7 厳密にはすでに後置詞 =ɛ⁴⁴ により動詞複合形式が名詞化されている可能性がある。後置詞 =ɛ⁴⁴ は一般には名詞句に後接し、所有を表す。しかし、自然発話では動詞複合形式にも現れ、動詞複合形式全体を名詞化し、「義務」「疑問」「推測」などのモダリティを意味に導入する機能があると考えられる。

表3 チノ語の -mɣ : 補文化

構造	文内位置
[節-mɣ]	文中

2.2.1 補文が伝達動詞の目的語となる場合

まずは伝達動詞の目的語としての補文化について、例を挙げる。本小節内では伝達動詞を sans serif 体で示す。

- (6) a. [khɣ³³-lo⁵⁵ waŋ³³pa³⁵ paŋ³⁵-mɛ⁴⁴] m̥³³-mjə⁴².
 あれ-ように ネットカフェ する-COMP 話す-PART
 「(彼/彼女は) あのようなネットカフェをやると言った」
- b. a⁵⁵xua⁴⁴=ɣ⁴⁴ [çi³⁵ mɔ⁵⁵-lu³³-mɛ³⁵] m̥³³-mjə⁴².
 アホア=TOP ここ NEG-来る-COMP 話す-PART
 「アホアはここに来ないと言った」
- c. ji⁵⁵ji⁵⁵ a⁵⁵tʃen⁴⁴ [çi³⁵ ɕa⁵⁵tu⁴⁴ mɔ⁵⁵-tʃa⁴⁴-vu⁵⁵ nə³⁵ ɕa⁵⁵=le⁴⁴-vi⁵⁵-mɛ⁴⁴] m̥³³-mɛ³⁵.
 昔 アチエンここ 部屋 NEG-ある-ので 2SG.OBL 住む=行く-CAUS-COMP
 話す-PAST
 「昔、アチエンはここには(余った)部屋がないからあなたを(あそこ
 に)住まわせるのだと言った」
- d. [ɣɔ⁴² khɣ³³-lu³⁵=ɛ⁴⁴ m̥³³-mɛ³⁵] mɔ³³-ŋɔ⁵⁵-tɔ⁴⁴-mɛ³⁵.
 1SG.NOM あれ-ように=POSS 話す-COMP NEG-聞く-EXP-PAST
 「(彼女は) 私があのように言ったのを聞かなかった」

(6) はいずれも -mɣ が節末に置かれ、補文を形成し、その補文が伝達動詞の目的語として存在する例である。[] 内に示されているのは -mɣ による補文である。自然発話では (6a-c) に見るように、動詞 m̥⁵⁵ 「言う」の目的語として補文が現れることが多い。(6d) のように m̥⁵⁵ 以外の動詞と共起する例は比較的少ない。

(6) の例を見ればわかるように、いずれも -mɣ によって補文化された内容を「言う」ないし「聞く」意味を表している。

2.2.2 補文が思考・感情の動詞の目的語となる場合

続いて、思考・感情の動詞と共起する例を見よう。本小節内では思考・感情の動詞を sans serif 体で示す。

- (7) a. [khɿ⁴² ɲu⁴² le⁴⁴-mɿ⁴⁴] nə⁴² tɕɛ⁴²-la⁴²?
 3SG.NOM どこ 行く-COMP 2SG.NOM 知る-Q
 「彼/彼女がどこに行ったか、知っているか?」
- b. [u⁵⁵sə⁵⁵ nə⁴² pja⁴²-mɿ⁴⁴] ɲɔ⁴² ma⁵⁵-su⁵⁵jɔ⁴⁴-su⁴².
 先ほど 2SG.NOM 話す-COMP 1SG.NOM NEG-知る-まだ
 「あなたが先ほど言ったことが分からない」
- c. ɲɔ⁴² [a⁵⁵pu⁴⁴ jə⁴⁴-mɿ⁴⁴] khø⁴⁴-nœ⁴⁴.
 1SG.NOM 父 叱る-COMP 恐れる-SFP
 「私は父が(私を)叱るのではないかと恐れている」

(7) の例はいずれも思考・感情を表す動詞が主節に置かれ、-mɿ で閉じられた補文 ([] 内の節) がその目的語となっている。基本的な構造は (6) で挙げた伝達動詞の場合と共通している。

(7a, b) のように -mɿ で閉じられた補文が文の先頭に現れ、その後で主節の主語・述語が現れる場合も多い*8。もちろん、(7c) のように、補文が主節の主語の後ろに置かれる場合も少なくない。

2.2.3 補文が主語となる場合

更に、自然発話においては比較的少数であるが、補文が主節の主語となっている例を挙げておこう。(8) を見られたい。

- (8) a. [a⁵⁵no⁴⁴=ni⁵⁵ koŋ⁵⁵tso⁴⁴ khœ⁴⁴-mɿ⁴⁴] tɕɿ⁵⁵-jɔ⁵⁵.
 後=日 仕事 する-COMP より-良い
 「これからよりしっかり仕事をしていく」
- b. [ɕi⁵⁵-lo⁴⁴ ɲu⁵⁵-mɿ⁵⁵] ɲu³³-a⁵⁵-nœ⁴⁴.
 これ-ように COP-COMP COP-PFT-SFP
 「このようにすべきだ」

*8 このような主節の目的語とみなされる補文が文頭に現れる場合、基本的に補文において話題の意味合いが強いと考えられる。

(8a, b) とも [] 内で示したように, -mɣ によって閉じられた補文が主節の主語として生起している, と考えられる。

(8a) は [] 内の補文の直訳は「後日仕事をする事」となり, これを述部である $tfɣ^{55}-jo^{55}$ 「よりよい」で叙述している構造をとっている。全体の直訳としては「後日仕事をする事はよりよくなる」となるが, その調整された意味は上に示したように, 「これからよりしっかり仕事をしていく」というものになる。

また (8b)*⁹ は [] 内の補文の直訳は「このようであること」となり, やはりこれを述部である $\eta w^{33}-a^{55}-nae^{44}$ 「そのとおりである」で叙述している構造をとっている。

2.3 時制標識 (過去)

-mɣ を述語の動詞複合形式内に置くと, 過去を表すことが可能である。その基本的構造は表 4 のようにモデル化できよう。

表 4 チノ語の -mɣ : 時制標識

構造	文内位置
[VERB-mɣ]	文末

表 4 の構造は実際には名詞化や補文化の構造と極めて近似している。なぜなら, -mɣ が主節の動詞複合形式の末尾に置かれた場合は表面的には名詞化ないし補文化の文であるとして解釈可能だからである。時制標識の -mɣ が名詞化ないし補文化の場合と異なる点としては, 一般に文末に置かれ, -mɣ の後続要素として文末助詞等を置くことができることなどが挙げられよう。

(9) で具体例を挙げる。

*⁹ (8b) ではコピュラ ηw^{55} が 2 個生起している。[] 内に生起している ηw^{55} は本来の機能である等位関係の標示を行っている。[] 内は状態を表す節のように解釈される。

主節の述部に置かれた ηw^{55} は先行する節で表されている事実を肯定する機能を持っている。このような ηw^{55} は相手の発話内容が正しいと認めるときに用いられ, 以下の i) のように単独でも生起しうる。

i) $\eta w^{33}-a^{44}$. 「うん / そうだ (そのとおりだ)」

COP-PART

コピュラ ηw^{55} の機能に関する分析は別稿に譲りたい。

- (9) a. $u^{55}sa^{55}na^{42}$ $mo^{55}le^{33}m\chi^{44}$.
 先ほど 2SG.NOM NEG-行く-PAST
 「あなたは先ほど(そこへ)行かなかった」
- b. $kh\chi^{55}kha^{55}ja^{44}$ $tshao^{33}fa\eta^{35}$ $\eta\chi^{33}me^{35}no\epsilon^{44}$.
 そのとき わらの家 COP-PAST-SFP
 「その当時はわらの家だった」
- c. $ja^{55}ren^{44}$ $phi^{55}mj\epsilon^{42}$, $mo^{33}kha^{55}khju^{33}me^{55}$.
 砂仁 担ぐ-PART NEG-渡る-AUX-PAST
 「男たちは砂仁(アモーム)を担いでいたので、(川を)渡れなかった」
- d. $x\epsilon^{55}me^{55}lo\epsilon^{44}$ $l\epsilon^{33}ja^{44}$ $pan^{33}lu^{33}me^{35}$.
 米=も あそこ=ABL 動く=来る-PAST
 「私たちは米もそこから運んだ」

(9) はいずれも $-m\chi$ により過去が表されている。(9a, b) では $u^{55}sa^{55}$ 「先ほど」, $kh\chi^{55}kha^{55}ja^{44}$ 「そのとき」といった過去を意味する副詞と共に起しているが、(9c, d) ではそのような副詞は文中に存在しない。よって、 $-m\chi$ のみで過去が標示されていると考えてよいだろう。

一般に肯定文・否定文でこの $-m\chi$ が生起した場合は (9a, c, d) のように、文末に置かれることが多い。しかし、(9b) のように、陳述を表す文終止助詞 $-no\epsilon^{44}$ などが後接することも可能である。

また、過去を表す $-m\chi$ は完了助詞 $-a \sim xa^{*10}$ とともに共起することが多い。

(10) でその例を挙げよう。

- (10) a. $a^{55}t\eta en^{44}ma^{55}la^{44}$ $wa\eta^{33}le^{33}m\chi^{44}a^{44}$.
 アチェン-PL しばらく 遊ぶ=行く-PAST-PFT
 「アチェンたちは(ネットカフェに)行って、しばらく遊んだ」
- b. $l\epsilon^{44}$ $a^{33}tha^{55}po^{44}$ $\epsilon a^{55}to^{44}m\chi^{44}$, $\eta a^{55}vu^{44}$ $mo^{55}lu^{33}su^{55}a^{44}$,
 あそこ 上方 住む-EXP-NML 1PL NEG-来る-まだ-PFT
 $kh\epsilon^{35}to^{33}me^{55}xa^{44}$.
 作る-EXP-PAST-PFT
 「あそこの(我々が)住んでいる上のところは我々がここに来る前にすでに建てられていた」

*10 チノ語では完了を表す助詞として $-a$ と $-xa$ の2つがある。パカ一下位方言の話者は $-a$ と $-xa$ の両方を会話の中で用いている。両者は基本的に交換可能である。

c. ɲo⁴² a⁵⁵ko⁴⁴ phi³⁵-mɿ⁴²-a⁴⁴-nce⁴⁴.

1SG.NOM 扉 閉める-PAST-PFT-SFP

「私はすでに扉を閉めた」

(10) の例ではいずれも共起した形式 -mɿ-a が発話時点よりもずっと以前に動作あるいは状態が完了・完成していることを表している。

2.4 関係節化

チノ語 -mɿ の機能として、最後に関係節化の事例を見ておこう。まず、-mɿ が用いられた関係節の基本的な構造を表 5 に示す。

表 5 チノ語の -mɿ: 関係節化

構造	文内位置
[節-mɿ]	名詞句の直前ないし直後

表 5 に見るように、チノ語の関係節は、基本的にその末尾に -mɿ が付加され、名詞句に前置される。実際には名詞句に後置される関係節も存在するが、それについては 2.4.2 で後述する。

チノ語では関係節が修飾する名詞句 (以下、「主名詞」とも呼ぶ) は、関係節内における主語・目的語・場所名詞句等に相当することが一般的である。以下、それぞれの例について記述していこう。なお、以下の例において、[] で閉じられた節は関係節を、下線が引かれた名詞句 は「関係節に対する主名詞」を意味している。

2.4.1 関係節と主名詞の関係

2.4.1.1 主語

まず、関係節内で主語に相当する例から見ていく。(11) を見られたい。

(11) a. [çi³⁵ lə⁴⁴ n³³tə⁴⁴-mɿ⁴⁴] mɾə³³ɕhe³⁵ khə⁵⁵mə⁴⁴-ma⁵⁵, khɿ⁴⁴

ここ 長い間 いる-REL ムラチエ.OBL 妻-PL あれ

mɔ³³-ŋw⁵⁵-a⁴⁴-ɿ⁵⁵ zɔ⁵⁵ku⁵⁵ a⁵⁵lai⁵⁵.

NEG-COP-PART-TOP 子供 ばかり

「ここに長い間座っていたムラチエの妻たちを除けば、子供たちばかりだ」

- b. a⁵⁵mo⁴⁴ [ma³³-no⁵⁵-to⁴⁴-mɿ⁴⁴] zo⁵⁵ku⁵⁵ jo³³-mɿ³⁵.
 母 NEG-聞く-EXP-REL 子供 叱る-PAST
 「母は言うことを聞かぬ子供を叱った」
- c. [khy⁴⁴ ko⁵⁵to⁴⁴ a³³ny⁵⁵ to⁴⁴-mɿ⁴⁴] mi⁵⁵khɔ⁵⁵, na⁴² tɕw⁵⁵-to⁴⁴-la⁴²?
 あれ 服 赤い 着る-REL 若い女性 2SG.NOM 憶えている-EXP-Q
 「あの赤い服を着た女の子を憶えているか?」
- d. [a⁵⁵fu⁵⁵ tho³³-ko⁵⁵-mɿ⁵⁵] tshə³³zo⁵⁵ thu⁵⁵=khu⁵⁵.
 先に 走る-PROG-REL 人 追いつく=届く
 「先に走っている人に追いつく」

(11) はいずれも主名詞に関係節が先行し、主名詞が関係節内では主語に相当する例である。(11a)の *mrə³³ tɕhe³⁵ khɔ⁵⁵ mo⁴⁴* 「ムラチエの妻」、(11b)の *zo⁵⁵ ku⁵⁵* 「子供」、(11c)の *mi⁵⁵ khɔ⁵⁵* 「若い女性」、(11d)の *tshə³³ zo⁵⁵* 「人」はいずれも関係節内では主語に相当する。

(11a) はやや注意を要する。(11a) の関係節が実際に修飾しているのは *mrə³³ tɕhe³⁵ khɔ⁵⁵ mo⁴⁴* である。この例で用いられる複数接尾辞 *-ma⁵⁵* は接辞化された固有名詞とその他の周りにいる人々を表す。関係節を含む名詞句全体、すなわち、*[ci³⁵ la⁴⁴ n³³ to⁴⁴-mɿ⁴⁴] mrə³³ tɕhe³⁵ khɔ⁵⁵ mo⁴⁴* に後接している。

2.4.1.2 目的語

続いて、主名詞が関係節内で目的語に相当する例について見ていく。(12) を見られたい。

- (12) a. [tjao³⁵=ju⁴⁴-mɿ⁴⁴] ɲo⁵⁵ts⁵⁵ to³³mo³³ a³³ni⁵⁵.
 釣る=とる-REL 魚 みな 小さい
 「釣ってきた魚はみな小さい」
- b. [na⁴² ju³³-mɿ⁵⁵] ko⁵⁵to⁴⁴ a³³thi⁵⁵ ju⁵⁵-tsɿ⁴⁴.
 2SG.NOM 買う-REL 服 少し 長い-すぎる
 「あなたが買った服は長すぎる」
- c. a⁵⁵me⁵⁵ [a⁵⁵mo⁴⁴ tɕha³⁵-mɿ⁵⁵] ne⁵⁵=so⁵⁵-no⁴⁴.
 ご飯 母 ゆでる-REL におう=心地よい-SFP
 「母が炊いたご飯はいい匂いがする」

(12) はいずれも主名詞が関係節内で目的語に相当している。(12a)の *ɲo⁵⁵ ts⁵⁵* 「魚」、(12b)の *ko⁵⁵ to⁴⁴* 「服」、(12c)の *a⁵⁵ me⁵⁵* 「ご飯」はいずれも関係節内で目的語に相当する。(12a, b) は関係節が主名詞に先行しているが、(12c) は主名詞

に対し、後置されている。関係節の後置については 2.4.2 で述べる。

2.4.1.3 場所

更に、関係節が場所名詞を修飾する例も少なくない。(13) でその例を挙げよう。

- (13) a. $l\phi^{33}=j\phi^{55}$ [$n\phi^{42}$ $\phi a^{33}-m\gamma^{55}$] $tshai^{35}tse\eta^{35}s\phi^{33}$ $thi^{33}=\phi o^{35}=l\phi e^{44}$
 あれ=PART 2SG.NOM 住む-REL 財政所 1=CL=PART
 $x\phi^{55}p\phi^{44} m\phi^{55}-k\phi\phi^{55}-a^{55}$.
 声 NEG-聞こえる-PART
 「あなたがいる財政所では人っ子一人の声も聞こえない」
- b. [$pa^{55}kha^{42} le^{44}-m\gamma^{44}$] $j\phi^{55}kho^{55}$ $jiu^{33}-m\gamma^{42}-a^{44}-n\phi e^{44}$.
 パカー 行く-REL 道 修理する-PAST-PFT-SFP
 「パカーにつながる道はすでに直っている」

(13) で下線が引かれている主名詞は関係節内の主語ないし目的語などの項構造とは関係ない。(13a) の主名詞「財政所」 $tshai^{35}tse\eta^{35}s\phi^{33}$ は関係節内では場所を表す副詞的要素と解釈できる。一方、(13b) の主名詞「道」 $j\phi^{55}kho^{55}$ は関係節内部といかなる文法的関係も持たない。(13b) における主名詞は関係節と意味的な関連性のみが認められる。

2.4.1.4 その他

-mɣ で構成された関係節が主名詞と主語・目的語の関係を持たず、また主名詞が場所でもない、まったく意味的な関連性しか認められない例も若干であるが存在する。その例を (14) に挙げる。

- (14) a. [$\eta\phi^{42}$ $x\phi^{33}-m\gamma^{55}$] $j\phi^{33}khi^{55}$ $m\phi^{33}-se^{55}-lu^{42}-a^{44}$.
 1SG.NOM 立つ-REL 足 疲れている-死ぬほど-くる-PFT
 「私は立っていたので足が極めて疲れた」
- b. [$tshi^{55}-m\gamma^{55}$] $tshi^{44}$
 咳きこむ-REL 薬
 「咳止め」*11

(14) はいずれも主名詞が関係節内の要素と主語・目的語の関係を持たず、意味的な関連性のみが存在する例である。

*11 「薬」は通常 $tshi^{55}$ のように 55 調で発音されるが、先行する声調 (本例では -mɣ⁵⁵) も 55 調である場合、往々にして 44 調で発音されることがある。

(14a) は関係節 $\eta\phi^{42} x\epsilon^{33}-m\gamma^{55}$ 「私が立つ」と主名詞 $\phi^{33} khi^{55}$ 「足」は主語・目的語の関係を持たず、意味的にしか関連しない。なぜなら、 $*\eta\phi^{42} \phi^{33} khi^{55} x\epsilon^{33}-m\gamma^{55}$ 「私は足で立つ」のような文は非文と見なされるからである。(14b) も同様である。関係節 $tshi^{55}-m\gamma^{55}$ 「咳きこむ」と主名詞 $tshi^{44}$ 「葉」はやはり意味的にしか関連しない。

このように $-m\gamma$ で閉じられた関係節は主名詞と意味的に関連することが可能である。

2.4.2 関係節の位置とその意味

2.4 節冒頭の説明では、チノ語の関係節は基本的に主名詞に前置されると述べた。しかし、実際にはチノ語の関係節は主名詞にしばしば後接しうる。(15) でその例を挙げよう。

- (15) a. $a^{55} m\phi^{44} \underline{z\phi^{55} ku^{55}} [ma^{33}-\eta\phi^{55}-t\phi^{44}-m\gamma^{44}] j\phi^{33}-m\gamma^{35}$.
 母 子供 NEG-聞く-EXP-REL 叱る-PAST
 「母は言うことを聞かぬ子供を叱った」
- b. $\eta\phi^{35} \underline{\phi^{33} khi^{55}} [x\epsilon^{33}-m\gamma^{55}] m\epsilon^{33}-se^{55}-lu^{42}-a^{44}$.
 1SG.OBL 足 立つ-REL 疲れた-ひどく-来る-PFT
 「私はずっと立っていたので足がひどく疲れている」
- c. $a^{55} m\epsilon^{55} [a^{55} m\phi^{44} t\phi ha^{35}-m\gamma^{55}] n\epsilon^{55}=s\phi^{55}-n\phi^{44}$.
 ご飯 母 ゆでる-REL におう=心地よい-SFP
 「母が炊いたご飯はいい匂いがする」 (= 12c)

(15) はいずれも関係節が主名詞に後置されている。(15a) は (11b) と、(15b) は (14a) と関連している。

話者によれば、関係節が主名詞に先行している (11b) および (14a) と、関係節が主名詞に対し後置されている (15a) および (15b)*¹² とは、基本的な意味において大きな差異はない。両者の差異はおそらく非常に微妙な程度のものであると推定される。

チノ語では通常文末に置かれる述語動詞に向かい、重要度の低い情報から重要度の高い情報へと情報が流れる*¹³。関係節が主名詞に先行しているときは主名

*¹² (15b) はやや構造面においても注意が必要である。関係節が主名詞に先行している (14a) では「私」を意味する $\eta\phi^{42}$ が主格形をとっている。一方で、関係節が主名詞に対し後置されている (15b) では $\eta\phi^{35}$ となっており、斜格形となっている。すなわち、(15b) では主名詞は $\eta\phi^{35} \phi^{33} khi^{55}$ 「私の足」全体となっている。

*¹³ このことを次の i) の対話から説明しよう。

詞のほうが重要度が高いのに対し、関係節が主名詞に後置されているときは関係節のほうが重要度が高いと考えられる。もしこれが正しければ、(15) の例では関係節のほうが主名詞に対して重要度が高いこととなる。すなわち、(15a) では「言うことを聞かぬ」が、(15b) では「立っている」が、(15c) では「母が炊いた」が、それぞれの主名詞に比して重要度が高い。

2.5 -mɿ の分析とまとめ

2.4 までで、表面的には -mɿ には名詞化、補文化、時制標識、関係節化の 4 つの機能が存在することを具体例を通して見てきた。本小節ではこれら 4 機能を再検討し、名詞化と関係節化の 2 つに集約できることを見たい。

まず、補文化についてである。補文そのものは主節動詞に対して主語あるいは目的語として機能することは 2.2 で述べたとおりである。チノ語において、主語ないし目的語になるのは基本的に名詞である。このことをふまえれば、補文化とは、「従属節の名詞化」とみなすことができる。2.1 で動詞そのものを名詞化する、いわゆる「狭義の名詞化」とともにまとめることができよう。

次に時制標識について再検討しよう。以下の (16) を見られたい。

- i) A: thi⁵⁵ma⁵⁵ mo⁵⁵-su⁵⁵-a⁵⁵. ji⁵⁵ji⁵⁵ jo³³kha³³-ma⁵⁵ tʃhə⁴⁴-ma⁴⁴-ɛ⁵⁵-noe⁴⁴,
 多い NEG-知る-PART 昔 老人-PL 語る-BEN-POSS-SFP
 ko³³-tɕi⁵⁵ ko³³-tɕi⁵⁵ su⁵⁵-a⁵⁵.
 それぞれ-少し それぞれ-少し 知る-PART

- B: pa⁵⁵kha⁴²=ɣ⁴⁴ thi⁵⁵-ɕo⁴⁴ ŋ⁵⁵-ɕo⁴⁴ tʃhə⁴⁴-khju⁵⁵-a⁴⁴ tʃə³³-su⁵⁵-ɛ⁴⁴.
 パカー=TOP 1-CL 2-CL 語る-AUX-PART いる-まだ-POSS

A: 「(昔話の) 多くは分からない。昔の老人たちが (私たちに) 語ってくれたけど、少しだけ理解したわ」

B: 「パカーは一人二人 (昔話を) 語ることができるのがまだいるよ」

ここでは A と B が本稿の筆者に対して「昔話ができる者」について説明した発話である。言語形式としては現れていないが、A も B もパカー村出身の話者である。

話者 A は「昔、パカーにいたころ、老人たちの語る昔話は少しだけしか理解できなかった」ことが提示されている。それに対し話者 B は「現在でもパカー村において語ることができる人が存在する」と述べている。そこで話者 B の発話の冒頭で、「パカー」pa⁵⁵kha⁴²の末尾に話題化を表す=ɣ⁴⁴が置かれている。これは話者 B の発話においては旧情報で、重要度が低い。それに対し、「昔話を語れるのが 1 人でも 2 人でも存在する」という情報は少なくとも筆者に対しては新情報で、かつ「パカー」よりも重要度が高いと見なすことができるだろう。

このようにチノ語では重要度の低い情報から高い情報へと文が構成される。

(16) ne^{35} $\eta u^{33}-me^{55}$ $\eta u^{33}-xa^{55}$.

2SG.OBL COP-PAST COP-PFT

「(それらは) あなたのものになった。」

(16) は過去の時制標識 $-m\chi$ がコピュラ動詞 ηu^{55*14} の直前位置に置かれている。 ne^{35} $\eta u^{33}-me^{55}$ 「あなたのものだった」に完了(変化)助詞 $-xa$ を伴ったコピュラ動詞 ηu^{33} が後続している。チノ語では通常コピュラ動詞の直前に置かれる要素は名詞性を伴う。そのため、(16)における $-m\chi$ も先行するコピュラ動詞を名詞化していると考えられる。これを敷衍して考察すれば、時制標識としての $-m\chi$ も他の用法と同じく、基本的にはその直前までの動詞複合形式を名詞化する機能があると言えるだろう。

最後に関係節化の機能について、分析してみたい。

チノ語において基本的に関係節は主名詞に対して先行する。しかし、一方で関係節のほうがやや重要度が高いと考えられる場合などでは、2.4.2 で上述したように、関係節が主名詞に対して後置されることがある。

(17) を見られたい。

(17) a. $a^{55}mo^{44}$ $zo^{55}ku^{55}$ [$ma^{33}-\eta o^{55}-to^{44}-m\chi^{44}$] $jo^{33}-m\chi^{35}$.

母 子供 NEG-聞く-EXP-REL 叱る-PAST

「母は言うことを聞かぬ子供を叱った」(= 15a)

b. no^{42} $ko^{55}to^{44}$ $a^{55}na^{42}$ $to^{55}-su^{42}-la^{42}?$

2SG.NOM 服 黒い 着る-まだ-Q

「あなたはまだ黒い服を着ているの?」

(17a) は主名詞である $zo^{55}ku^{55}$ 「子供」に対して関係節が後置されている。この後置された関係節と、形容詞が用いられた (17b) の例を対比してみる。(17b) は一般的な形容詞が用いられた例である。チノ語では形容詞は被修飾名詞に対して後置される。ここで重要なのは形容詞の基本形は統語的には名詞とほぼ同じ振る舞いをする点である。形容詞の基本形は「[a-/la-/jo-] + 動詞語根」で構成される。この接頭辞 a-/la-/jo- は動詞を名詞化する機能を持っている。このため、名詞と同じように、チノ語の形容詞は数量詞句を後続させたり、単独で主語や目的語にもなりうる。すなわち、形容詞基本形による名詞修飾は、構造的には「被修飾名詞 + 修飾名詞」の複合語に近い、と言えよう。

この点から後置された関係節の例 (17a) を見る。この場合もやはり修飾要素で

*14 チノ語のコピュラ動詞は単独では 55 調で読まれることが多い。

ある関係節は形容詞基本形の場合と同じく、統語的には名詞性を帯びていると考えられよう。関係節が先行する場合とは異なり、後置された関係節は一種の「名詞句」と解釈され、主名詞と同格的な要素として存在していると見なせるのではないだろうか。

この考察を裏付ける例として、以下の (18) を見られたい。

- (18) a. $[\eta\sigma^{42} \quad \text{ti}^{35}\text{-mv}^{55}] = \emptyset / * = \chi^{44} \quad \text{a}^{33}\text{pjo}^{55} \quad \text{a}^{33}\text{ti}^{55}$.
 1SG.NOM 送る-REL=TOP 手紙 少ない
 b. $\text{a}^{33}\text{pjo}^{55} = \emptyset / = \chi^{44} \quad [\eta\sigma^{42} \quad \text{ti}^{35}\text{-mv}^{55}] \quad \text{a}^{33}\text{ti}^{55}$.
 手紙=TOP 1SG.NOM 送る-REL 少ない
 「私の送った手紙は少ない」

(18a) は関係節が主名詞に先行した例、(18b) は関係節が主名詞に後置された例である。(18a) と (18b) は基本的に意味上の差異がない。ここで、話題を明示する後置詞 $=\chi^{44}$ に着目したい。(18b) では、主名詞の直後に後置詞 $=\chi^{44}$ を置くことができる。それに対し、(18a) では後置詞 $=\chi^{44}$ を置くことができない。これから分かることは、(18b) では主名詞と関係節が構造的に分離できるのに対し、(18a) ではそれが不可能である、ということである。関係節が主名詞に先行する例では、関係節が修飾要素として名詞に相対的に密接に連結しているのに対し、関係節が主名詞に後置される例では、主名詞と関係節がそれぞれ構造的には独立した要素として見なすことができる。更に、(18b) で見るように、主名詞の直後に話題の後置詞を置くことができることから、文字通りの意味としては「手紙は私が送ったのは少ない」と解釈される。すなわち、主名詞の「手紙」と後置された関係節「私が送ったの」はともに名詞性要素と見なされ、同格的な解釈を受けるのである*15。

*15 白井 (1999) はチベット語新共通方言の名詞修飾に「主要部内置型」と「主要部外置型」の2種類があると述べ、そのうち「主要部外置型」は主要部と修飾部が同格的な解釈を受ける、と主張している。

白井 (1999: 70-71) によると、チベット語新共通方言では主要部が修飾部に対して前置される構造は容認度が低くなるものの、主要部が topic 化されている場合であれば、容認されるようである。

i) a. ?'yige [ˈbugu.tee ˈgeebo.la ˈdaŋ.ba] te ˈtuŋduŋ.du
 手紙 子供 DEM-GIS 老人 LA 送る NML DEM 短い AUX
 b. [ˈbugu.tee ˈgeebo.la ˈdaŋ.bei] ˈyige te ˈtuŋduŋ.du
 子供 DEM-GIS 老人 LA 送る NML-GI 手紙 DEM 短い AUX
 「その子供が老人に送った手紙は短い」

したがって、関係節が主名詞に対して後置された場合、*-mv*は関係節全体を名詞化する機能をもつと考え、関係節が主名詞に先行する場合を区別する。*-mv*が関係節化の機能を有するのは、関係節が主名詞に先行した場合に限られると考える。

以上の議論を表6にまとめる。

表6 チノ語の *-mv* のまとめ

大機能	構造	文内位置	小機能
名詞化	V- <i>mv</i>	文中	名詞化
	節- <i>mv</i>		補文標識
	V- <i>mv</i>	文末	時制標識 (過去)
	節- <i>mv</i>	主名詞の直後	関係節化
関係節化		主名詞の直前	

表6の「大機能」とは本小節でまとめられた *-mv* の総合的な機能を指し、「小機能」とは2.4までに記述してきた *-mv* の表面的な意味・解釈に現れる機能を指す。「大機能」とは形式的・統語的な観点を元にまとめられた機能であり、「小機能」とは形式に依拠しながらも意味的な点も考慮に入れた機能であるとも言える。

3 漢藏語との対照と通時的考察

本節ではチノ語 *-mv* の機能をより明確にするため、漢藏語、すなわちシナ・チベット諸語の対応する助詞との対照を試みる。

まず、3.1では漢藏語における対応する形式について検討する。3.1.1では漢語普通話の助詞「的」*de*について、3.1.2ではチベット・ビルマ諸語の対応する形式についてまとめる。具体的にはラフ語^{*16}、ベルハレ語^{*17}について検討する。

3.2では、3.1.1および3.1.2で見た言語の状況をふまえ、チノ語 *-mv* が表面的な意味・解釈を行う際に多機能的であることは決して特異な現象ではなく、むしろ

italic 体は主要部、[]内は修飾部である。通常、主要部が後置される i)b に比べ、i)a は容認されにくい。主要部が topic 化されている場合のみ容認可能であるようだ。

^{*16} 主に中国雲南省とタイ北部で話される、チベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語支に属する言語の一つ。

^{*17} 主にネパール東部で話される、チベット・ビルマ語派キランティ諸語に属する言語の一つ。

ろチベット・ビルマ諸語内では一般的であることなどを確認し、各言語の対照を行う。そして 3.3 でチノ語 -my の通時的発展について検討し、漢語からの影響が生じていることについて指摘する。

3.1 漢藏語の“-my”

3.1.1 漢語普通話「的」de

本小節では漢語普通話の助詞「的」de の機能について見ていく。

漢語の文法記述において「的」は通常「結構助詞」、すなわち「構造を明示する助詞」として扱われている。「的」de に関する研究は膨大であり(朱 1961, 朱 1966, 朱 1978a, 朱 1978b, 朱 1980, 呂 1980, 朱 1982, Chu 1987, 木村 2003, 陸 2003 など), そのすべてに言及することはできない。本小節ではもっとも簡潔に全体を総括している Chu (1987) を元にまとめておきたい。

Chu (1987: 101)*¹⁸は漢語「的」de には以下の(19)の9個の用法があると述べている。

- (19) a. [形容詞標識] *hóng de* 「赤い」
赤い DE
- b. [名詞化] *mài dōngxi de* 「商売人」
売るもの DE
- c. [所有格標識] *wǒ de* 「私の」
1SG DE
- d. [関係代名詞] *nǐ zuótiān kàn de shū* 「あなたが昨日読んだ本」
2SG 昨日 見る DE 本
- e. [様態副詞あるいは結果副詞の導入]
chī de hěn bǎo 「食べて満腹になる」
食べる DE とてもいっぱいである
- f. [「是」*shì* との共起]
tā shì zuótiān lái de
3SG COP 昨日 来る DE
「彼は昨日来た」もしくは「彼が来たのは昨日だ」
- g. [同格標識] *wǒ shībài de shìshí* 「私が失敗した事実」
1SG 失敗する DE 事実

*¹⁸ Chu (1987) では例に声調表記とグロスが付されていない。(19)での声調表記とグロスは筆者による。

h. [可能標識] kàn de jiàn 「見える」

見る DE 見える

i. [副詞標識] hǎohāo de 「適切に」

良い.RDP DE

Chu (1987) では (19a-g) に関しては統一的な説明が与えられると述べている。そして特に (19f) の *shì ... de* の構造に着目しながら、結論として *de* は (その直前の要素を) 従属節化する機能を持ち、(意味的に) 何らかの前提を指しうると考えている^{*19}。

漢語 *de* の用法は表面的には非常に多岐にわたっており、それを元にこれまでの先行研究も詳細に分類する傾向が多い。Chu (1987) のように一部の用法を除いて、*de* の機能を統一しようとする立場は少数派と考えられる。

Chu (1987) は *de* の機能を「従属節化」および「前提の提示」と考え、(19h, i) の 2 用法をはずしてまとめている。ここでは Chu (1987) の分析を改めて形式的な側面を中心に捉えなおし、やや形式的にも特殊な (19h)^{*20}を除いた (19) の 8 用法の再分類を試みてみよう。

まず、(19a, b) について見る。(19a) は形容詞に *de* が後接した形式である。し

^{*19} Chu (1987) は (19e) の *de* は通常「的」ではなく「得」と漢語普通話では書かれるが、これは「的」*de* と音韻的に同じであり、漢語北方方言では他方言で区別されているこの 2 種の“*de*”が合流したと考えられるため、(19e) の *de* も他と同様に取り扱う、と述べている。ちなみに、書記上の習慣としては (19h) も「得」と書かれ、また (19i) では「地」と書かれるのが通常である。

朱 (1961, 1982) はこのようにすべての“*de*”を同一であるかのようにみなす立場は様々な点で問題があると考え、特に (19e, h) の *de* は他の用法と別個に扱うべきだと考えている。更に朱 (1961) では (19) に挙げられるような“*de*”の用法は「的₁」(副詞性要素化)、「的₂」(形容詞性要素化)、「的₃」(名詞性要素化)の 3 種に分類すべきだと考えている。

朱 (1961) の観点も (19e, h) を考察対象からはずしている点を除けば、結論的には、本稿における *de* の機能の解釈と大きく異ならない。すなわち、「的₁」は動詞修飾の機能と見なせる。「的₂」は重複形容詞による名詞修飾、すなわち本稿における関係節化の機能があると考えられる。「的₃」は名詞化であると解釈できる。しかし、朱 (1961) では動詞に *de* が後接した形式はすべて名詞化されていると見なしており、その点は本稿の立場と異なっている。

^{*20} (19h) は他の用法と比較してもやや特殊である。もちろん、(19h) の例を「見たものが見える」のように解釈すれば、(19h) の *de* も名詞化の一種に含みうるかもしれない。しかし、可能補語の用法を考えれば、*de* に後続する動詞が必ずしも *de* に先行する動詞の述部であることを表しうる機能があるかどうか、議論の余地が大いにある。そのため、本稿でも (19h) の用法を考察対象からはずしておく。

かし、この後接した形式は統語範疇としては形容詞とは考えにくい。漢語のいわゆる形容詞は一部の2音節語を除いて、形態統語的に動詞と極めて近似した振り舞いを見せるため、一種の状態動詞として位置づけてもよい^{*21}。したがって、もし形容詞を状態動詞の一種と見なすなら、形態統語的には(19b)の動詞句に *de* が後接した形式と同様に扱うことができる。(19a, b)の *de* は名詞化の機能を持つと分析できる。

次に(19c)についてみよう。これは *de* の先行する形式が名詞、あるいは代名詞の場合である。このときは Chu (1987) のまとめるように、所有格の標示機能があると言える。

(19d, g)について、更に見ていこう。(19d)の *de* は先行する節を後続名詞に修飾させる、いわゆる関係節化の機能がある。(19g)は Chu (1987) によれば、同格標識とされているが、これもやはり *de* に先行する節を後続名詞に修飾させていると見なせなくもない。節の名詞修飾機能を関係節化の一種と考えれば、(19d, g)の *de* は総じて関係節化機能を持つ、とまとめられる。

(19e)の *de* は漢語文法では一般的に(19h)の *de* と同じく、「補語」をとる機能があると考えられている^{*22}。朱(1961)などでは、これらを(19a, b)などと統一して解釈することはできないと主張している。しかし、少なくとも(19e)の *de* に関しては、構造的に(19a, b)と同じく名詞化機能をもつと解釈することは可能である^{*23}。本稿ではこの(19e)の用法も(19a, b)と同様に名詞化の一変種として扱いたい。

(19f)は Chu (1987) が詳細に扱っているように、やや複雑である。大きく2種類に分けられ、*shì* を必ず伴わなければならないタイプと伴わなくてよいタイプが存在する。前者の *shì* を必ず伴わなければならないタイプは基本的に(19a, b)と同じく名詞化の機能があると考えられる。

(20) *tā shì [jiāo shū de]*.

3SG COP 教える 本 DE

^{*21} もちろん、漢語の形容詞は動詞とは異なる範疇と見なす議論もあろう。動詞は通常 *de* を用いなければ名詞を修飾できないのに対し、形容詞は1音節であれば直接名詞を修飾できるからである。本稿では漢語の形容詞が多くの点で動詞と共通していることを重視し、動詞と同じ範疇に属すると見なす。

^{*22} 一般的には(19e)の *de* は「結果補語」、(19h)の *de* は「可能補語」を導入する、とされている。

^{*23} すなわち、(19e)であれば、*chī de* を主語、*hěn bǎo* を述語と捉え、「食べた状態がいっぱいだ」と解釈する。

「彼/彼女は教師です」(Chu 1987: 103)

Chu (1987) は (20) の例から *de* も *shi* も省略することはできず, *shi* と *de* が相互に関与しあっていると述べている. 筆者はこのような例でもやはり (19a, b) と同じ名詞化機能が *de* にあると考え, *shi* は主語と *de* の後接した形式とを等位関係において連結しているにすぎないと解釈する.

Chu (1987) では *shi* が伴わなくてもよいタイプを (20) の伴わざるをえないタイプと区別し, 伴わなくてもよいタイプの *de* は文の前提を標示すると考えている. しかし, 筆者は上記の 2 タイプの違いは基本的に意味解釈のレベルに起因すると考え, 構造上はやはり *de* は先行する節の名詞化を行っていると考え^{*24}.

最後に (19i) である. これは基本的には形容詞の重複形に *de* が後接した形式である. Chu (1987) はこの例を「従属節化」の機能からはずしているが, 本来主節になりうる形容詞が述語動詞を修飾するために重複されて *de* が後接しているため, 従属節化の一変種と捉えても問題はないと思われる. ただし, ここでは全体として述語動詞を修飾する点を重視し, *de* の動詞修飾機能の例と捉えておく.

以上, Chu (1987) の掲げた 9 用法のうち, (19h) を除いた 8 用法を以下のとおりに再分類した. 表 7 にそれをまとめた.

表 7 漢語「的」*de* の基本的機能のまとめ

機能	例
名詞化	(19a, b, e, f)
関係節標識	(19d, g)
所有格	(19c)
動詞修飾	(19i)

3.1.2 チベット・ビルマ諸語

本小節ではチベット・ビルマ諸語から該当する言語形式について引用し, まとめてみよう. 最初にラフ (Lahu) 語とベルハレ (Belhare) 語について具体例を引用しながら, 検討する. ラフ語については Matisoff (1973: 140–153, 440–453, 1988: 1330–1338, 2003: 219–220) から, ベルハレ語については Bickel (2003: 557, 566) から引用する. その後, 3.1.2.3 で他のネワール語カトマンズ方言 (Kathmandu

^{*24} これを漢語普通話における一種の補文化と見なせなくもないが, 本稿ではこれ以上の言及を控える.

Newar)*²⁵, トウルン・ライ (Thulung Rai) 語*²⁶の当該形式を含めて、一覧にまとめる。

3.1.2.1 ラフ語 *ve*

まずは、ラフ語から見てみよう。Matisoff (1972, 1973, 1988, 2003) によれば、ラフ語 *ve* にもチノ語同様、名詞化、関係節化および補文化の機能がある。以下に、その例を引用する。

● 名詞化

(21) *i-kâ? hé ve*

水浴びをする NML

「水浴び; 水浴びをすること」 (Matisoff 2003: 219)

● 関係節化

(22) [*nò ò-mî-ma cō tā ve*] *và?-ó-qō câ pò ò lâ*

2SG 妻 ゆでる 置く REL 豚-頭 食べる 終わる ASP Q

「あなたの奥さんがゆでておいた豚の頭はみんな食べてしまったの?」

(Matisoff 2003: 220)

● 補文化

(23) [*yô kâ? qay ve*] *nò šī à lâ*

3SG も 行く COMP 2SG 知る EMPH Q

「彼も行っている/行った/行くつもりであることをあなたは知っていますか?」 (Matisoff 1988: 1330)*²⁷

(21) の *ve* は先行する動詞句 *i-kâ? hé* 「水浴びをする」を名詞化している。(22) の *ve* は後続する名詞 *và?-ó-qō* 「豚の頭」に対し、先行する節を関係節化して修飾させている。更に (23) の *ve* は先行する節 *yô kâ? qay* 「彼も行っている/行った/行くつもりだ」を補文化し、主節動詞 *šī* 「知る」の目的語にしている。

更に、ラフ語の *ve* は名詞に後接し、属格を標示できる。

*²⁵ ネパール王国カトマンズ市で話される、チベット・ビルマ語派ネワール諸語に属する言語の一つ。

*²⁶ 主にネパール王国東部で話される、チベット・ビルマ語派キランティ諸語に属する言語の一つ。

*²⁷ (23) の [] は本稿筆者による。

● 属格

(24) Cà-lô ve ô-ha

ジャロ GEN 写真

「ジャロの写真」 (Matisoff 1973: 141)

(24) の ve は Cà-lô 「ジャロ」 に後接し、属格を標示している。

以上から、ラフ語 ve は名詞化、補文化、関係節化および属格標示の 4 つの機能を持っていることが分かる。チノ語 -mɣ とは属格標示以外の機能が共通していると言える。

3.1.2.2 ベルハレ語 -khak ~-hak

続いてベルハレ語である。ベルハレ語の -khak ~-hak (環境により -ha などになる) もチノ語と同様、名詞化、関係節化、補文化の機能を有する。以下にその例^{*28}を引用しよう。

● 名詞化

(25) hale mand-u-ŋŋ-ha.

前 終わる-3P-1SG-NML

「私はずっと前に終わっていたよ!」 (Bickel 2003: 557)

● 関係節化

(26) [dahi ka-khui?-sa-ha]

ma?i

ヨーグルト [-SG.ABS] 1INCL.P-[3SG.A-] 運ぶ-TRANS.PART-NML 人 [-SG.ABS]
he-lleŋ khar-e?

wh-DIR [3SG.SDA] 行く-PAST

「ヨーグルトを持ってきてくれた人はどこへ行ったの?」 (Bickel 2003: 566)

● 補文化

(27) [tas khonɣ-a-ŋŋi-ha]

*i, jma?-yakt-he.

トランプ 遊ぶ-SUBJ.PAST-[1SG]EXCL-NML [3sg.SDA-] 語る-IMPF-PAST

「彼/彼女は私がトランプで遊んだと言っていた」

(「『私_i はトランプで遊んだ』と彼/彼女_j が言っていた」という意味にはならない) (Bickel 2003: 566)

^{*28} (26, 27) における従属節標示 ([l]) は本稿筆者による。

(25) の -ha は直前の *mand-u-gg* 「(私は) 終わっている」を名詞化している。(26) の -ha は先行する *dahi ka-khuiʔ-sa* 「ヨーグルトを運んできた」を関係節化し、後続する名詞 *maʔi* 「人」を修飾させている。(27) の -ha は先行する節 *tas khoŋs-a-gg* 「私はトランプで遊ぶ」を補文化している。いずれもチノ語 -mɣ と共通した機能と言えよう。

3.1.2.3 チベット・ビルマ諸語のまとめ

ここで、3.1.2.1, 3.1.2.2 で見たラフ語およびベルハレ語の当該の言語形式に加え、ネワール語カトマンヅ方言とトゥルン・ライ語の事例も含めて、チベット・ビルマ諸語における“-mɣ”について表 8 でまとめてみよう。ネワール語については Hargreaves (2003: 379) から、トゥルン・ライ語については Lahaussais (2005: 87-98) から引用する。

表 8 チノ語 -mɣ と他のチベット・ビルマ諸語の相当する標識との類似点・相違点

	チノ	ラフ	ベルハレ	ネワール	ライ
機能/形式	-mɣ	<i>ve</i>	<i>-khak~</i> <i>-hak</i>	<i>-gu</i> (INANI), <i>-mho</i> (ANI. SG), <i>-pi</i> (ANI. PL)	<i>-m</i> , <i>-mu</i> , <i>-mim</i> , (<i>-ma</i>)
名詞化	OK	OK	OK	OK	<i>-mu</i>
関係節化	OK	OK	OK	OK	<i>-m</i> , <i>-mim</i>
補文化	OK	OK	OK	NG	<i>-mu</i>
所有格/属格	NG	OK	NG	<i>-gu</i>	<i>-m</i> , <i>-mim</i>

表 8 によれば、チノ語と同様、ラフ語、ベルハレ語、トゥルン・ライ語^{*29}の 3 言語も名詞化、関係節化、補文化の各機能を同一形式が担うことが分かる。また、ネワール語は名詞化、関係節化の機能を同一形式が担い、所有格/属格に関してはチノ語は不可能であるが、ラフ語およびネワール語の一部の形式が可能であることも分かる。トゥルン・ライ語は *-mu* が名詞化および補文化において可能であるので対し、*-m/ -mim*^{*30} は関係節化および属格において可能であることは注目すべきである。この点については 3.2 で更に詳しく検討したい。

^{*29} Lahaussais (2005) では *-ma* も関連する形式として提示しているが、Lahaussais (2005) 自身述べているように、*-ma* は代名詞の属格標示の一部にのみ現れ、生産的な形式ではない。そのため、表 8 では括弧にくくった。

^{*30} この 2 形式は音韻的環境による生起条件がある。先行形式が母音で終わっている場合、*-m* が、子音で終わっている場合は *-mim* が用いられる (Lahaussais 2005)。

3.2 類型論的考察

以上、チノ語のみならず、漢藏語のいくつかの言語においても、一つの言語形式が補文化、関係節化、名詞化などの多機能を担うことが確認できた。実はこのような観点はすでに Matisoff (1972)^{*31}, Herring (1991), Noonan (1997)^{*32}, Bickel (1999) および DeLancey (2005) など指摘されており、漢藏語の共通した特徴として見なされている^{*33}。漢藏語では同一形式が上記の機能を担うことは決して珍しい現象ではないと言うことができよう。それでは、なぜそのようなことが起こるのだろうか。

2.5 でみたように、補文化は節を名詞化するという点で、動詞(句)の名詞化と基本的性質が同じであると言える。そして、補文化と関係節化は節を従属節化するという点で共通している。また関係節化と属格標示は、ある言語形式を名詞に修飾させる点で共通している。動詞修飾をさらに含めると、ある言語形式に修飾機能を持たせる点で共通している^{*34}。

問題は、関係節化と名詞化にいかなる共通点があるか、ということである。両者は表面的には共通点を見出しにくい。しかし、表9^{*35}のように、漢語とネパール語では同一形式が担う機能が補文化では不可能だが、関係節化と名詞化では可能である。これらの言語では関係節化と名詞化を同じカテゴリとして捉え、補文化と区別している。これをどのように捉えればよいだろうか。

関係節化は通常主名詞との関係を考えなければならない。名詞化は一方で主名

^{*31} Matisoff (1972) ではラフ語 *ve* と同様に同一の言語形式が名詞化や補文化、関係節化に用いられることはチベット・ビルマ諸語一般に見られる傾向であると述べ、ビルマ語 *te*、デンポー(カチン)語 *ʔai*、チベット語 *pa ~ba* について若干の検討を行っている。

^{*32} Noonan (1997) はチベット・ビルマ語派タマン語群に属するツァンティヤル(Chantyal)語の接尾辞 *-wa* を通してチベット・ビルマ諸語の「名詞化」について類型のおよび通時的に論じている。特に類型的に論じている箇所(pp. 389–391)では、同一の言語形式が「補文化」「目的節標示」「名詞化」「属性標示(attributive)」「動詞複合形式(verb complex)」の機能を担いうるが、それらはすべて基本的に「名詞化」としてまとめられると述べている。

^{*33} このほか戴(1989)はロロ・ビルマ諸語の中には同一形式で様々な機能を担うことに言及しているが、特に本稿で扱ったような名詞化や補文化の問題について詳細には扱っていない。

^{*34} 表9のチノ語の項目では、後置詞 $=\epsilon^{44}$ が属格標示と動詞修飾の2機能を兼ねていることも合わせて記述した。この点に関しては3.3で言及する。

^{*35} 参考までに表9では($::$)で、チノ語の後置詞 $=\epsilon^{44}$ 、漢語 $-\emptyset$ の持つ機能も示した。

表9 チノ語および漢藏語の同一形式による補文化・名詞化・関係節化・属格・動詞修飾

言語/機能	補文化	名詞化	関係節化	属格	動詞修飾
チノ語	////////////////////////////////////			(:.....:)	
		-mɣ			(=ɛ ⁴⁴)
漢語	(:.....:)	////////////////////////////////////			
	(∅)			de	
ベルハレ語	////////////////////////////////////				
		-khak ~-hak			
ラフ語	////////////////////////////////////				
			ve		
ネワール語		////////////////////////////////////		:.....:	
		-gu, -mhɔ, -pĩ		-gu	
ライ語	////////////////////////////////////		:.....:		
		-mu		-m, -mim	

詞が欠けた関係節構造と捉えられなくもない。以下に、漢語の例を挙げる。

(28) a. tā shì [jiāo shū de] rén.

3SG COP 教える 本 DE 人

「彼/彼女は本を教える人です」(=「彼/彼女は教師です」)

b. tā shì [jiāo shū de].

3SG COP 教える 本 DE

「彼/彼女は教師です」(= 20)

(28a, b) はともに基本的な意味に差異はない。(28a) は主名詞 *rén* 「人」を、関係節 *jiāo shū de* 「本を教える」が修飾する例である。(28b) は表面的な構造としては動詞句 *jiāo shū* 「本を教える」に *de* が後接し、全体を名詞化していると考えられる例である。しかし、両者を対照すると、(28b) の名詞化の例は主名詞の欠落した関係節と解釈できなくもない。このように名詞化は主名詞の欠落した関係節と捉えれば、名詞化と関係節化を同じカテゴリに含める言語が存在しうるのも自然な現象であると見なせる^{*36}。そして補文化と上記2機能(すなわち、名詞

^{*36} 朱(1961)は(28)の例はいずれも名詞化であると考えている。

化と関係節化)の差異は、補文化は他の名詞の関連で捉えないのに対し、上記2機能は他の名詞との関連付けが可能な点^{*37}にあると言える。漢語^{*38}とネワール語はまさしくその現象が存在すると見なせる言語である。

以上の議論から、上記の漢蔵語においては補文化、名詞化、関係節化、属格、動詞修飾を同一形式で表すことが一般的であり、かつ表9のように、この順序で機能が連続的に解釈されている可能性^{*39}を指摘できよう。加えて、上記に挙げた言語の中で、チノ語はベルハレ語と最も典型的に近いことも指摘できる。

3.3 -mɣ の通時的発展

本小節ではチノ語 -mɣ の通時的発展について言及したい。

3.3.1 -mɣ のチベット・ビルマ祖語共通形式からの発展の可能性

現代のチベット・ビルマ諸語の関連する形式を羅列すると、それぞれ音形的に全く異なる形式を用いていることが分かる。上記の言語を含むチベット・ビルマ諸語の関連形式^{*40}を表10で掲げよう。

表10 チベット・ビルマ諸語の“-mɣ”一覧

口口系諸語		その他のチベット・ビルマ諸語	
チノ語	-mɣ	チベット語	-pa~ba
ハニ語	ɣ ³³	ベルハレ語	-khak~-hak
ノス・口口語	∅, vi ³³ , su ³³	トウルン・ライ語	-m, -mim, -mu
リス語	ma ⁴⁴ , tɛ ⁵⁵	ハカ・ライ語	-mii, -tuu, -naak
ラフ語	ve	ネワール語	-gu, -mho, -pī

^{*37} 関係節化の場合は主名詞との関連付けがなされる。名詞化の場合は主名詞が表面的には現れない関係節化であると考えれば、これも表層には生起しない主名詞との関連付けがなされうると考えられる。

^{*38} 漢語がチベット・ビルマ諸語と大きく異なる点として基本語順が挙げられる。漢語で補文化が無標であるのも、漢語の基本語順がSVOであり、補文と主節の関係は語順により明示できるためであると考えられる。チベット・ビルマ諸語の基本語順は大部分でSOVであり、補文と主節の間を何らかの言語形式によって明示しなければ、解釈が困難になると考えられる。

^{*39} もし名詞化、補文化、関係節化、属格、動詞修飾の順序で連続的に解釈されていると考えると、漢語とネワール語で、なぜ名詞化と関係節化の2機能を同一形式で表しているかが捉えにくくなる。

^{*40} 新しくここで掲げた口口系諸語は胡(2002)から、チベット語はDeLancey(2005)から、ハカ・ライ語はPeterson(2003)から引用した。

表 10 を見れば分かるように、チベット・ビルマ諸語の該当形式を比較すると、各言語の形式は非常に異なることが多い。特に同系と考えられる、口語系諸語を比較しても、形式が非常に異なることから、これらの形式の多くは各語支、各言語に分化してから発展したものと考えられる。

ただ、胡 (2002: 150) が指摘するように、同源形式からの発展も可能性が無いわけではない。胡 (2002: 150) ではチノ語 -mɣ とリス語 ma⁴⁴ が同源であると述べている。しかし、更に広くチベット・ビルマ諸語を見れば、表 10 に見るように、トゥルン・ライ語 -m, -mim, -mu, ハカ・ライ語 -mii, ネワール語 -mho もチノ語・リス語と同源の可能性が考えられる。ともすれば、チベット・ビルマ祖語の段階で何らかの共通形式が存在したかもしれないが、これ以上の検討は現時点ではやや困難であろう。ここではチノ語 -mɣ のチベット・ビルマ祖語共通形式からの変化の可能性についてのみ言及しておきたい。

3.3.2 漢語との言語接触による構造的借用

チノ語 -mɣ と漢語 de は表 9 に見るように、他のチベット・ビルマ諸語に比して、共通した機能は比較的少ない。しかし、現代のチノ語は漢語と接触することにより、非常に多くの構造的な影響を蒙っている。最後に、チノ語の -mɣ が漢語から構造的な借用を行っている事例について記述しておきたい。

3.3.2.1 所有関係の標示と形式の固定化

チノ語では所有関係を標示する際、-mɣ ではなく、後置詞 =ɛ⁴⁴ を用いる。

(29) ʃaŋ³³li³³=ɛ⁵⁵/ *-mɣ⁴⁴ zɔ⁵⁵ku⁵⁵

李さん=POSS 子供

「李さんの子供」

(29) に見るように、チノ語では所有関係を表す際、所有者名詞に後置詞 =ɛ⁴⁴ を後接させる^{*41}。-mɣ を後接させると非文法的となる。チノ語 -mɣ は基本的に

^{*41} ちなみにチノ語では動詞修飾を行う際も後置詞 =ɛ⁴⁴ を用いることがある。

i) pja⁵⁵=pja⁵⁵=ɛ⁴⁴/ *-mɣ⁴⁴ tɔ⁴².

ゆっくりだ=ゆっくりだ.RDP=POSS 飲む

「ゆっくりと飲みなさい」

i) の例でもやはり -mɣ を後接させると非文法的になる。注目すべきは、所有関係と動詞修飾において後置詞 =ɛ⁴⁴ という同一形式を用いている点である。このことから、チノ語では動詞を中核とする語句または節を名詞化したり、名詞に修飾させる現象と、名詞の所有関係の表示と動詞修飾の現象を別個にカテゴリ化しているこ

動詞(句)を中核とした語句ないし節にしか後接しない。名詞類に後接し、後続名詞を修飾することはできない。

しかし、チノ語 *-mɿ* も非常に限られているが、名詞類に後接しているように見えることがある。(30)を見られたい。[J.] はチノ語、[Ch.] は漢語を示す。

- (30) a. [J.] *khɿ⁴⁴-mɿ⁴⁴-təu³⁵* b. [Ch.] *nà shíhou*
 あれ-*mɿ⁴⁴*-とき あれ とき

「その当時」

(30a) のチノ語では名詞類の一種、指示詞 *khɿ⁴⁴* 「あれ」に *-mɿ* が後接し、後続する *təu³⁵* 「とき」を修飾している。全体としては「その当時、あるとき」を表している。チノ語ではこれと同時に *khɿ⁴⁴təu³⁵* 「その当時」のように *-mɿ* を用いずに同様の表現を行うことができる。注意すべきは (30b) のように漢語普通話では *de* が用いられていない。それでは (30a) で *-mɿ* が名詞類に後接する動機はどこにあるのだろうか。

その解答として *-mɿ-təu³⁵* という形式が固定化している可能性を挙げたい。(31)を見られたい。

- (31) a. [J.] *nə⁴² ʃi⁵⁵=mjo⁵⁵ ŋw⁴⁴-mɿ⁴⁴-təu³⁵, nə⁴² ʃue³⁵ʃao³⁵*
 2SG.NOM 七=CL COP-*mɿ*-とき 2SG.NOM 学校
 le⁴⁴-jo⁴⁴.
 行く-OBLIG
 b. [Ch.] *nǐ qīsuì de shíhou, nǐ yào qù xuéxiào.*
 2SG 七歳 DE とき 2SG OBLIG 行く 学校
 「七歳になれば、学校に行かねばならない」

(31a) では *-mɿ* がコピュラ *ŋw⁵⁵* に後接しているため、「*-mɿ* は動詞(句)を中核とする語句ないし節にのみ後接しうる」という原則に従っている。ただし、これを同内容を表す漢語の例 (31b) と対照すると、*-mɿ-təu³⁵* という形式は実際には漢語の *de shíhou* の形式を構造的に借用している可能性が浮かび上がる。

このように考えると、(30a) で指示詞 *khɿ⁴⁴* に *-mɿ-təu³⁵* が後接しているのは、*-mɿ-təu³⁵* が漢語から構造的に借用された後、「~(の) とき」を表す形式として固定化したためであると説明できよう。そのため、(30b) のように漢語で *de* が用いられないような例においても、チノ語で *-mɿ* が用いられるようになったと

とが分かる。

解釈できよう。

3.3.2.2 形容詞の限定標識

チノ語の形容詞基本形は名詞を修飾する際、(32)のように、基本的に名詞に対して後置される。

- (32) a. kɔ⁵⁵tɕ⁴⁴ a³³ŋɣ⁵⁵
 服 赤い
 「赤い服」
- b. kɔ⁵⁵tɕ⁴⁴ a³³ŋɣ⁵⁵ŋɣ⁵⁵
 服 赤い.RDP
 「とても赤い服」

多くのチベット・ビルマ諸語では形容詞が名詞を修飾する際、名詞に対して後置されるのが基本である。チノ語もその例に漏れない。ただし、一方で形容詞が名詞に前置される例も存在する。(33)を見られたい。

- (33) a. a³³ŋɣ⁵⁵ -mɣ⁴⁴ kɔ⁵⁵tɕ⁴⁴
 赤い -REL 服
 「赤い服」
- b. a³³ŋɣ⁵⁵ŋɣ⁵⁵ -mɣ⁴⁴ kɔ⁵⁵tɕ⁴⁴
 赤い.RDP -REL 服
 「真っ赤な服」

(33) のような形容詞が名詞に前置される例は自然発話ではほとんど現れないが、文法的であると話者に判断される。チベット・ビルマ諸語の多くの言語で(33)のように形容詞が名詞に前置される例が可能である。しかし、形容詞が無標で後置修飾されるのに対し、チノ語を含め、チベット・ビルマ諸語の形容詞が前置される場合、必ず(33)の -mɣ のごとき形式が生起しなければならない。またいくつかのチベット・ビルマ諸語では形容詞の前置修飾の構造が存在しない^{*42}。このことから戴・傅(2002)が指摘するように、チベット・ビルマ祖語には形容詞の後置修飾のみがあり、前置修飾の構造は各言語に分化してから発生したと考えられる。しかし、前置修飾の構造が各言語で発生した理由については、戴・傅(2002)では言及していない。

もちろん、前置修飾を発生させた経緯は各言語によって異なるだろうが、チノ語に関しては漢語の影響が少なからず前置修飾構造の発生に関与していると考えられる。チノ語の形容詞基本形は動詞語根を内在させているが、名詞化接頭辞 a-/la-/jo- が前接しているため、全体としては基本的に名詞と同じ振る舞いをする。上述のとおり、-mɣ は名詞に後接することはできないため、形容詞基本形に -mɣ が後接する構造はチノ語本来の構造とは考えにくい。

^{*42} 例えば、カレン語やチアン語などが挙げられる。

(33) に対応する漢語普通話の形式 (34) を対照してみると、チノ語と漢語普通話の構造はきわめて平行的であることが分かる。

(34) a. *hóng de yīfu*

赤い DE 服

「赤い服」

b. *hónghóng de yīfu*

赤い.RDP DE 服

「真っ赤な服」

(34a, b) はそれぞれ (33a, b) に対応している。自然発話では (33) がほぼ現れることなく、(34) をチノ語訳する際などに主に可能となることもあわせて考えれば、(33) の例は漢語の形式を構造的に借用している可能性が非常に高いと言える。

3.3.2.3 漢語からの構造的借用のまとめ

表 9 によると、漢語 *de* とチノ語 *-mx* は機能的に平行する部分は他の言語に比べて少ないが、3.3.2 で見てきたように、チノ語話者において、漢語 *de* はチノ語 *-mx* に対応すると捉えられ、漢語 *de* の構造を *-mx* で置き換えて借用する事例が確認される。これはいわばチノ語における翻訳借用 (*calque*, *loan translation*) の一例と見なすことができよう^{*43}。

4 おわりに

本稿ではチノ語 *-mx* が表面的には名詞化、補文化、過去標識、関係節化の 4 つの機能を持つことを記述し、それが以下のように「名詞化」「関係節化」の 2 つの「大機能」に再整理できることを述べた。

^{*43} 漢語 *de* が少数民族言語に与えた影響は小さくないと考えられる。チノ語のようにチノ語固有の形式を用いて、構造部分のみを借用する場合もあるが、漢語 *de* の音形をも借用してしまう事例が中国領内のタイ・カダイ諸語に見られる。以下で、それを表にまとめる。

	チワン	パイ	ルー	ヌア	カム	ムーラオ	マオナン	マーク	プヤン
固有	<i>tu</i> ⁶ , <i>hoŋ</i> ¹	<i>ka:i</i> ⁵	<i>heŋ</i> ⁵ , <i>ke</i> ⁵	<i>xoŋ</i> ¹ , <i>an</i> ²	—	<i>ko</i>	—	<i>tə</i>	<i>naŋ</i> ¹¹ , <i>han</i> ²⁴
借用	<i>ti</i> ⁶	<i>ti</i> ⁵	—	—	<i>tji</i> ⁶	<i>ti</i> ⁵	<i>ti</i> ⁰	<i>ti</i> ³	<i>ti</i> ³³

チワン語、パイ語、タイ・ルー (西双版纳/傣) 語、タイ・ヌア (徳宏/傣) 語、カム語、ムーラオ語、マオナン語は王ほか編 (1984) から、マーク語は楊 (2000) から、プヤン語は李 (1999) から引用している。この表によれば、多くのタイ・カダイ諸語で漢語の *de* を音形とともに借用していることが分かる。漢語 *de* は他の形式に比べて、少数民族言語において借用されやすい形式であるとも考えられよう。

1. 名詞化: 名詞化, 補文化, 過去標識, 関係節化 (後置修飾)

2. 関係節化: 関係節化 (前置修飾)

また周辺の漢藏語の対応する形式と対照し, 特にベルハレ語 -khak ~-hak と類型的に同じタイプに属することを見た. 更に漢語との言語接触から, 漢語 de の構造の一部が -mɣ の構造に影響を与えている可能性について言及した.

本稿では -mɣ と関係があると考えられる -m について, ほとんど扱えなかった^{*44}. -mɣ と -m は共時的にいかなる関係があり, また通時的にはどのように発展してきたかについては, 今後の課題としたい.

略号一覧

文頭の*は非文であることを示す. また ‘-’ はその前後のいずれかが拘束形態素であることを, ‘=’ はその前後の両方ともが自立形態素であることを示す. また数字の 1, 2, 3 はそれぞれ 1 人称, 2 人称, 3 人称であることを示す.

A	動作者 (他動詞)	EXCL	除外形
ABL	奪格	EXP	経験
ABS	絶対格	GEN	属格
ACP	達成	GI	チベット語 gi 格
ANI	有生	GIS	チベット語 gis 格
ASP	アスペクト	IMPF	未完了
AUX	助動詞	INCL	包括形
BEN	受益	INANI	無生
B/R	受益・相互	LA	チベット語 la 格
CAUS	使役	NEG	否定
CL	類別詞	NML	名詞化標識
COMP	補文標識	NOM	主格
COP	コピュラ	OBL	斜格
DE	漢語 “的”	OBLIG	義務/許可
DEM	指示詞	P	経験者 (他動詞)
DIR	方向	PART	助詞
EMPH	強調	PAST	過去

^{*44} *4 を参照されたい.

PFT	完了	SFP	文終止助詞
PL	複数	SG	単数
POSS	所有	SUBJ	接続法
PREF	接頭辞	T/A	テンス・アスペクト
PREV	前動詞	TOP	話題
PROG	進行相	TRANS	他動詞
Q	疑問	VA ..	後置詞 =va ~a (場所格, 対格, 与格等の標示)
RDP	重複		
REL	関係節標識		
SDA	単一直接項 (自動詞)		

参考文献

- BICKEL, Balthasar 1999. Nominalization and focus constructions in some Kiranti languages. In Y. Yadava and W. Glover (eds.), *Topics in Nepalese Linguistics*. pp. 271–296. Kathmandu: Royal Nepal Academy.
- 2003. Belhare. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*. pp. 546–570. London and New York: Routledge.
- CHU, Chauncey C. 1987. *De* as a Particle of Presupposition. In The Chinese Language Society of Hongkong (ed.), *Wang Li Memorial Volumes*. (English Volume) pp. 101–119. Hongkong: Joint Publishing.
- 戴慶厦 (DÀI Qìngxia) 1989. << 緬彝語的結構助詞 >> << 語言研究 >> 1989 年第 2 期: 118–126.
- 戴慶厦・傅愛蘭 (Fù Àilán) 2002. << 藏緬語的形修名語序 >> << 中國語文 >> 2002 年第 4 期: 373–379.
- DELANCEY, Scott 2005. Relativization and Nominalization in Bodic. In Patrick Chew (ed.), *Proceedings of the Twenty-eighth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society: Special Session on Tibeto-Burman and South-east Asian Linguistics*. pp. 55–72. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- 蓋興之 (GÀI Xìngzhī) 1981. << 基諾語概況 >> << 民族語文 >> 1981 年第 1 期: 65–79.
- 1986. << 基諾語簡誌 >> 北京: 民族出版社.

- HARGREAVES, David 2003. Kathmandu Newar (Nepāl Bhāṣā). In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*. pp. 371–384. London and New York: Routledge.
- 林 範彦 (HAYASHI, Norihiko) 2002. 「チノ語の音韻に関する研究—周辺諸語を見据えて—」 京都大学大学院文学研究科修士論文.
- 2005. Polyfunctionality of the particle -mɣ in Youle Jino. Circulated at the 38th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (Xiamen University, Xiamen, China).
- HERRING, Susan C. 1991. Nominalization, relativization, and attribution in Lotha, Angami, and Burmese. *Linguistics of Tibeto-Burman Area*. 14 (1): 55–72.
- 胡素華 (HÚ Sùhuá) 2002. ≪ 彝語結構助詞研究 ≫ 北京: 民族出版社.
- 木村 英樹 2003. ≪ “的” 字句的功能擴展 ≫ ≪ 中國語文 ≫ 2003 年第 4 期: 303–314.
- LAHAUSOIS, Aimée 2005. Nominalization, relativization, genitivization in Thulung Rai. In Patrick Chew (ed.), *Proceedings of the Twenty-eighth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society: Special Session on Tibeto-Burman and Southeast Asian Linguistics*. pp. 87–98. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- 李錦芳 (Lǐ Jǐnfāng) 1999. ≪ 布央語研究 ≫ 北京: 中央民族大學出版社.
- 陸儉明 (Lù Jiǎnmíng) 2003. ≪ 對 “NP + de + VP” 結構的重新認識 ≫, ≪ 中國語文 ≫ 2003 年第 5 期: 387–391.
- 呂淑湘 (Lǚ Shūxiāng) 1980. ≪ 現代漢語八百詞 ≫ 北京: 商務印書館.
- MATISOFF, James A. 1972. Lahu Nominalization, Relativization and Genitivization. In John P. Kimball (ed.), *Syntax and Semantics*. Vol. 1: 237–257. New York, San Francisco and London: Seminar Press.
- 1973. *The Grammar of Lahu*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press.
- 1988. *The Dictionary of Lahu*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press.
- 2003. Lahu. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*. pp. 208–221. London and New York: Routledge.

- NOONAN, Michael 1997. Versatile Nominalizations. In Joan Bybee, John Haiman and Sandra A. Thompson (eds.), *Essays on Language Function and Language Type — Dedicated to T. Givón* —. pp. 373–394. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- PETERSON, David 2003. Hakha Lai. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*. pp. 409–426. London and New York: Routledge.
- 白井 聡子 1999. 「現代チベット語の名詞修飾構造」『言語研究』第 116 号: 59–95.
- 王均 (WÁNG Jūn) 等編 1984. 《壯侗語族語言簡誌》北京: 民族出版社.
- 楊通銀 (YÁNG Tōngyǐn) 2000. 《莫語研究》北京: 中央民族大學出版社.
- 朱德熙 (ZHŭ Déxī) 1961. 《說“的”》《中國語文》1961 年第 12 期: 1–15.
- 1966. 《關於《說“的”》》《中國語文》1966 年第 1 期: 37–46.
- 1978a. 《“的”字結構和判斷句》《中國語文》1978 年第 1 期: 23–27 (上).
- 1978b. 《“的”字結構和判斷句》《中國語文》1978 年第 2 期: 104–109 (下).
- 1980. 《北京話, 廣州話, 文水話和福州話里的“的”字》《方言》1980 年第 3 期: 161–165.
- 1982. 《語法講義》北京: 商務印書館.

The “Polyfunctionality” of Jino -mɣ

— Contrast with Sino-Tibetan Languages —

Norihiko Hayashi

Abstract

-mɣ is a versatile morpheme in Jino (Tibeto-Burman, Lolo-Burmese). It seemingly functions as nominalizer, complementizer, past tense marker and relativizer. In this paper, I describe the characteristics of -mɣ and claim that the functions of -mɣ can be analyzed as nominalizer and relativizer.

Table: Functions of Jino -mɣ

Major Function	minor function
Nominalizer	nominalizer, complementizer, past tense marker, and relativizer (introduces a pre-modifying clause)
Relativizer	relativizer (introduces a post-modifying clause)

Besides, in contrast to other Sino-Tibetan languages we find that they all have versatile morphemes like Jino -mɣ. Among the Sino-Tibetan languages that I consider in this paper, the function of -khak ~-hak in Belhare seems to be very similar to -mɣ in Jino.

This paper also deals with the structural influence of Chinese on Jino -mɣ. Although the Chinese *de* does not seem very similar to Jino -mɣ, it probably caused Jino -mɣ to develop new usages, such as a modifying marker of adjectives.

(受理日 2006年7月27日)